

マタイ福音書講話（10）

マタイ 5章 6～9節【山上の説教（5～7章）を始める】

6節「義に飢え渴く人々は、幸いである。その人たちは満たされる。」

義とは「正しさ」のことである。「正しい者はいない。一人もない。」（ローマ 3:10）とあるので、人間には義（正しさ）はない。神だけが義であり、正しい方である。ゆえに義に飢え渴くとは、神に飢え渴くということになる。神は御自分を求める者に、姿を現し、その人を満たして下さるであろう。人はその飢え渴きに従って与えられるからである。

さらに、義とは神が求められるあらゆる正しい生活、正しい生き方でもある。「主の目は正しい者に注がれ、主の耳は彼らの祈りに傾けられる。」（一ペトロ 3:12）、
「もしある人が正しく、正義と恵みの業を行うなら…彼は必ず生きる。」（エゼキエル 18:5）とあるように、神様は私たちに正しい生き方を求めておられる。だから、神様が私たちに求めておられる「正しい生き方」をいつも求めているなければならない。それはイエス様を見本として生きることである。イエス様だったらこんなときに、どうされるだろうかをいつも考え、神に問いながら生きなければならない。決して「人間の正しさ、自分の正しさ」を生きてはならない。人間の正しさは他者との比較であり、歪んでいるからである。世の中には「自分の正しさ」を主張する人がいる。「私は正しい。間違っているのは～さんである。それなのに何で私はこんな目に遭わなければならないのか。私の正しさを認めて欲しい、私の正しさに報いて欲しい」という。しかし先も言ったように正しい人は誰もいない。キリストの十字架の前ですべての人の正しさは沈黙しなければならない。キリストは唯一正しいのに裁かれた。しかもこの方は自分の正しさを主張しなかった。だから本当に「義に飢え渴く人」は、必ず「自分は正しくない」ことを知り、「キリストだけが正しい」ことに到達するはずである。自分の義を求める人がいかに多い事か。宗教でさえ、自分の義を証明するための道具になっている。ファリサイ人がそうだった。

- ・「私は軽々しくものを申しておりました。どうしてあなたに反論などできませんよう。私はこの口に手を置きます。ひと言語りましたが、もう主張しません。」（ヨブ 40:4～5）
- ・「百人隊長はこの出来事を見て、本当にこの人は正しい人だった、と言って神を賛美した。」（ルカ 23:41）
- ・「われわれは自分のやったことの報いを受けているのだから当然だ。しかし、この方は何も悪いことはしていない。」（ルカ 23:41）

私たちがこのヨブや百人隊長や、強盗の魂を持つことができますように祈ろう。

神のなさったことはことごとく正しい、と神にのみ栄光を帰そう。

「その人たちは満たされる」というのは、神が「義」を満たしてくれるというのである。食べ物が肉体の飢え渴きを満たしてくれるように、神の御心に沿った生き方を行うことはその人の魂の飢え渴きを満たしてくれるはずである。

7節「憐れみ深い人々は、幸いである。その人たちは憐れみを受ける。」

「憐れみ」は神の性質の一つであり、相手の弱さに同情し、苦しみや痛みや悲しみを分かち合う心である。英語では「シンパシー」という。この英単語は「スン（一緒に）」＋「パスカイン（経験する、苦しむ）」からできている。憐れみとは、他者と一緒に苦しみ、同じ様に痛むことなのである。だから同じ苦しい経験をした者だけが、相手を思いやり、憐れむことができる。イエス様は神でありながら人となって、人の苦しみを経験された。だから私たちが憐れむことができるのである。

・「イエスは神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならなければならなかったのです。事実、ご自身試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちの助けを助けることができになるのです。」（ヘブライ 2：17～18）

そのように隣人を憐れむ人は、神に似て来るのである。人間が肉体と魂からできているように、憐れみも肉体的憐れみと、霊的な憐れみの二種類がある。「憐れむ方法は様々あり、その戒めは広い」と聖クリュソストモスは言っている。肉体の憐れみとは、飢える者に食べさせ、渴く者に飲ませ、裸の者に衣服を与え、牢獄に居る者を訪問し、病人を尋ねて見舞いや看護をし、癒しを求め、死の準備をさせ、旅人に宿を貸して休ませ、貧しい者を助けることである。霊的な憐れみとは、罪人を柔和な心で諭し、誤った道から帰らせ、無知な者に真理を教え、人の為に神に祈り、悲しむ者を慰め、悪に報いようとせず、人から与えられた侮辱に報いようとせず、その人の罪を赦すことである。

- ・「人に憐れみをかけない者には、憐れみのない裁きが下されます。憐れみは裁きに打ち勝つのです。」（ヤコブ 2：13）
- ・「私が求めるのは憐れみであって、いけにえではない。」（マタイ 9：13）
- ・「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」（ルカ 6：36）
- ・「主の憐れみは決して尽きない。」（エレミヤ哀歌 3：22）

このようにあなたが隣人を憐れむなら、神は地上にあっても、天国においてもあなたを憐れんでくださるだろう。

8節「心の清い人々は、幸いである。その人たちは神を見る。」

心は入れ物、器である。その中にはいろいろな思いが入っている。「清い」ものとは天上のもの、神から来たものだけである。だから私たちの心が清くなるためには、天上のもの、神からのものを心に入れて、心を一杯に満たすしかない。

・「二心の者どもよ、心を清くせよ。」(ヤコブ 4:8)

・「無垢であろうと努め、まっすぐに見ようとせよ。」(詩編 37:37)

これらの言葉から分かるのは、清さとは心が二股になっておらず、一途であることである。神にも頼り、この世にも頼るといようなことではなく、神に一途に頼っている状態のことである。人は片方の目で天を見上げ、片方の目で地上を見ることは出来ない。天を見ている時には、地を見ることはなく、地を見ている時には天を見ることはない。

・「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁っていれば、全身が暗い。」(マタイ 6:22)

聖書は、人が何を見るかによって、明るくもなり暗くもなると言っている。信仰している人の目は澄んでおり、神の光を受け入れて内側から輝くという。それぞれの動物は、それぞれの環境に合った視力、聴力を持ち合わせている。例えば鷹の目は何百メートル上空から地上の獲物を捉え、拡大して見ることができる。コウモリの耳は人間が聞こえない音まで聞こえ、鴨の目は 180 度見渡すことができる。人間が神に似せて創造されており、神と交わるように創造されているのなら、神を見る目、神の声を聞く耳を備えられているはずである。しかし罪によってそれらの感覚器官は鈍り、能力は閉じられてしまっている。神を見る代わりに、蛇・悪魔の誘惑によって善悪知識の木(この世の物質のみ)を見るようになってしまったからである。しかし神を見始めるならば、次第に焦点は合ってきて、だんだんと神を見ることができるようになるであろう。嵐に遭った弟子たちも、最初は水の上を歩かれるイエス様を幽霊であるかのように見ていたが、キリストの声を聞き、対話をするを通してはっきりと見えるようになった。私たちも同じである。聖書を読み、アイコンで神の国を想像し、祈禱するなら、だんだんと神の国とキリストと聖人たちの姿がはっきりとしてきて、見えるようになるであろう。

●「人間は自分で神を見ることはできないが、神が自らお望みになるなら、自分の望む人々に、望む時、望む方法で、人間たちに見られるものとなるであろう。」「人は神を見ることが可能であるということと、終りの時には、人が神の知恵を通して、高い所で、すなわち「みことば」の人としての来臨において、神を見るようになることを示している。…預言者たちは神の顔そのものではなく、救いの営みと秘義を見たのであって、これらのものによって人類が神を見始め

たのである。」(2世紀のエイレナイオス)

私たちはイエス様を通して、父なる神を見たのである。イエス様こそ、モーセに示された岩であり、イエス様という岩を通して父なる神の後ろ姿を見るのである。

9節「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。」

「平和を造り出す人たち」(口語訳)「和平を行う者」(正教会訳)「平和をもたらす人」(フランシスコ会訳)

平和を単に願うだけではなく、平和を実現する、平和を作る人は幸いであるといわれる。平和はどの人でも望んでいるが、実際にそれを作ることは難しい。夫婦も親子も学校も社会も教会も平和を求めている。すべての人が平和を求めているのにどうして平和が訪れないのか。理想の家庭、理想の職場、理想の社会、理想の教会などどこにもない。平和は何もしないで転がり込んでくるものではない。罪人が集まるところ、どこであっても争い、妬み、嫉妬、恐れ、分裂、問題が起こる。大事なことは自分が動くことである。分裂があったら、まず自分が和解する。怒りがあったら、まず自分が赦す。

ラジオ番組「心のともしび」のキャッチフレーズは「暗いと文句をいう前に、自分で明かりをつけましょう」である。平和を実現するとはこのようなことである。

●「神よ、わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。憎しみのあるところに愛を、いさかいのあるところにゆるしを、分裂のあるところに一致を、疑惑のあるところに信仰を、誤っているところに真理を、絶望のあるところに希望を、闇に光を、悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください。…」(平和の祈り)

平和のモデルとはキリストである。キリストは神と人を和解させるために来られた。完全な平和とはキリストだけであり、キリストが平和の源である。

- ・「平和の源である神が、あなたがた一同と共におられるように。」(ローマ 15 : 33)
- ・「わたしは平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。」(ヨハネ 14 : 27)
- ・「神の国は飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。」(ローマ 14 : 17)
- ・「キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。」(コロサイ 3 : 15)

これらの御言葉は、「この世の与える平和」と、「キリストが与える平和」とは質が違うということを行っている。平和を実現するといっても、どのような「平和」なのかを考えなければならない。キリストが与える平和とは、聖霊による平和であって、天国の香りがする平和である。自分の中に誰かに対する恨みや怒りがあるなら、それは天国の平和ではない。だから平和を造り出す者は、まず自らがキリストによって心の内に平和を持っていなければならない。人の心の中に罪、怒り、恐れ、不安、死がある以上、人は平安であることはできないからである。恐れを取り除き、不安という波を静めることができるのはキリストだけである。

●ザドーンスクのティーホン（18世紀）

《平安》とは、この世での一番の幸せである。心の平安なくては何事も快くない。私たちは健康がどんなにすばらしいお恵みであるかを、それが奪い去られたときに知るのと同じように、このことを私たちが知るのは、私たちが悪、恐怖や混乱に支配されている、精神的な苦しみのときである。けれどもこの世では休息を求める事は不可能である。海は絶え間なく動いている。それは高い波と低い波があつて、静まることはほとんどない。私たちの人生とはそのようなものである。人は休息を求めて、それを捜し出そうとあちらこちらをさまようが、失敗するのは、彼がこの世にないものを求めるからである。この空虚な世から孤独へ退き、そして、そこでさまざまな思いの侵入や、悪魔の攻撃などから来る、もっと数多くのまた残酷な誘惑に出会う。都市や村では、私たちの心を常に悩ませ、怒りで燃え上がらせる醜聞に囲まれている。醜聞に満ちたこの世は災いである。キリスト教徒は、いつも外的なまたは内的な誘惑に乱されているために、外部に休息を見出し得ないけれども、それでもいつも、至るところで休息を持つことができ、また持たねばならない。…強められた魂は、安全な港にいる舟のように、いつも安らいでいる。これがこの世での私たちの幸せである。